

平成 27 年度 第 1 回 学校教育相談研修会報告書

私学教育相談部会 副部長 西ヶ谷信義

講師：静岡県立大教授 津富 宏氏

H27. 9. 14 <私学会館 5F>

演題：「しんどい若者と付き合っただこと」

はじめに・・・NPO法人青少年就労支援ネットワーク静岡の東部地区の活動をDVDにて放映。ボランティアだけでも 200 人を超える。今までに数千人の職員が、数千人の生徒と関わってきた。とても一人ではできないこと。基本は「無力」で、家も地域も変えることは出来ないが、みんなの力を合わせれば可能である。きれい事ではないが、きれいである・・・学校も正しいものは報われるもの。地域の隙間のあるところでも成り立つ。「仲間がいる」「人を信じる」ということを広げていきたい。

<少年院で>

*少年院は桃源郷みたいなところだと言えます。自分の無力さを悔しいと思いつつも、「もっとできる」「チャンスはいくらでもある」とも感じながら仕事をしていました。少年たちの全体に目を向け、言葉にならない部分・・・少年たちのやりとりであるとか、コミュニケーションを通して、一人ひとりの集まりとしての「集団」を育てていくのです。また、その集団の状態をキープすることが大切で、環境で人の行動は変わるものなのです。落ち着いた環境の少年院から出た少年は落ち着いており、それは再犯率に表れてきます。審判が悪ければゲームが荒れるのと同じことで、良いこと悪いことをきちんと区別することが重要です。

少年たちは、自分がこういうことをしたら先生方はどう出てくるかを見ているのです。嘘はつけないわけで、そうした中で最後には私たちの人間性が見抜かれるのです。たとえば、隙間風が入ってくる所を直すであるとか、見えないところのひとつひとつを丁寧に扱うことが大切です。

指導の基本は「審判」であり、良いか悪いかをきちんと判断し、感情的になったら部屋に戻って冷ませばよいのです。少年たちの問題行動に対しての対処ではなく、「人」に対処することが大事です。一瞬一瞬を大切に、時系列で一人ひとりを細かく追いつけ、さまざまな場面で話しかけることで、時にツボにはまることもあります。手を変え品を変え、変化をつけることで状況を膠着させない・・・放っておかないことが大切です。また、少年一人ひとりにテーマを持つことが大切です。リーダーシップを発揮する場面や、その子が涙を流す瞬間はどこかなど、その子のツボを得ること。ツボは痛い・・・触れられたくない点なのです。

また、人は多面体なので、相性が合わないなどと言っただけではいけないのです。それでは商売にならないのです。人に見せている面もあるし、刷り合わない面もある。合う面を探しながら、徐々に解消していくのです。少年たちは、口で言っただけでは納得しないので、一緒に経験することも大事です。やらないことは分からないのです。指導は一人ではできないので、チームを作り入れ替わり立ち代わり、二重三重の仕組みを作っておくことが大切です。それには責任体制も明確にし、非常事態への準備も整備しておく必要があります。

講師の言葉：「自分がしんどい若者と付き合っているなどと思っただけではいけない。

環境で人は変わります。」

<就労支援で>

*一人での支援は難しいので、必ず仲間と活動し、組織を作ることが大切です。そもそも9割は疑ってかかっているので、圧倒的な善意があることを知らせ、絶対にできると信じるのが大切です。この人は何をしたら一番頑張れるか。本人の好みに寄り添う形をとること、小さなことをきっかけに人の善意を感じさせること、人に接する場面を作り、人に混ぜることで、「人のシャワー」を浴びせてやるのです。そして、その人が腰を浮かせた時に、背中を押してあげるのです。ただ、ニコニコ楽しただけではなく、深いところで付き合えるようになれば良いと思います。

講師の言葉より・・・「真実性は、本人の中にしか存在しない。」

「若者たちが、専門職としての私たちを育てる。」